大阪公立大学
Osaka Metropolitan University

PRESS RELEASE

配信先：大阪科学・大学記者クラブ、文部科学記者会、科学記者会

2025 年 1 月 10 日
大阪公立大学

双子への児童虐待は、母親の健康状態の悪化が強く関連
－3 歳児健診などのデータから分析－

＜ポイント＞
◇双子への虐待発生率は単胎児よりも約 3 倍高く、86%は母親が虐待者であることを確認。
◇妊娠期からの育児支援により、双子に対する児童虐待の発生が低減する可能性。

＜概要＞
日本では、出生率が年々低下しているにもかかわらず、児童虐待に関する相談件数は増加し続けています。被虐待児の約半数は就学前から虐待を受けていることが報告されており、特に多胎児は単胎児と比べて、育児における母親の身体的、精神的負担が大きいため、虐待のリスクが高いと言われています。しかし、多胎児への虐待の発生率や発生要因について、地域に在住するすべての子どもを対象とした検証は、これまで十分に行われていませんでした。

大阪公立大学大学院看護学研究科の横山 美江教授らの研究グループは、3 歳児健康診査のデータと、自治体の保健師が支援を行った被虐待児や虐待を受けている疑いのある児童に関する記録をもとに、双子への虐待の発生率とその関連要因を分析。双子への虐待の発生率は、単胎児への虐待の発生率よりも約 3 倍高いことが明らかになりました。また、単胎児、双子ともに母親が虐待者となるケースが最も多く、虐待が認められた家庭の多くで、母親の心身の健康状態が悪化していることが分かりました。

本研究結果により、虐待発生の背景には、妊娠中からの心身の不調が改善しないまま育児が始まり、多胎育児で生じる過度な負担によって母親の健康状態が極度に悪化する可能性のある育児環境があることが明らかになりました。母親や養育者に対する妊娠中からの育児情報の提供や、産後の育児支援による育児負担の低減が重要であることが示されました。

本研究成果は、2024 年 12 月 6 日に、国際学術誌「Twin Research and Human Genetics」にオンライン掲載されました。

双子の遺伝子情報の特性を活かした「双生児研究」に 20 年以上携わっています。そのなかで、双子をもつ母親の「死ぬような思いをして双子を育ててきた」、「マンションのベランダから飛び降りようと思うことがよくある」等の深刻な声を耳にし、強い衝撃を覚えました。研究者として、多胎児家庭が置かれている状況を社会に提示する必要性を感じ、研究を進めています。

横山 美江教授

＜研究の背景＞

児童虐待は、子どもの健康や安全を脅かすだけでなく、成長や発達の遅れや、経済的・社会的格差の発生、成人後の健康問題につながる可能性があります。世界的に深刻な問題として認識されており、日本でも児童虐待の相談対応件数が年々増加しています。日本の母子保健法では健康診査の最終年齢を 3 歳と定めており、その年齢までに実施される健康診査において、虐待のリスクや関連要因を特定することが重要です。特に多胎児は、児童虐待のリスクが高いグループに位置付けられていますが、多胎児の虐待に関する出生人口に基づいた研究（地域に在住するすべての子どもを母集団としての研究）は、ほとんど行われていませんでした。

＜研究の内容＞

本研究では、日本の出生人口に基づいたデータを用いて、3 歳の単胎児と双子への児童虐待（以下、不適切な養育）の発生率とその関連要因を分析しました。その結果、単胎児 1,000 人に対し 4.31 人が、双子 1,000 人に対し 14.31 人が虐待を受けており、他の要因を調整しても双子は被虐待児になる可能性が単胎児よりも約 3 倍高いことが判明しました。また、被虐待児のうち身体的虐待を受けていた単胎児は 42%でしたが、双子では 100%が身体的虐待を受けており、その半数は心理的虐待も受けていました。さらに、被虐待児の性別は、単胎児の場合は 58%が、双子の場合は 86%が男児でした。

虐待者の傾向を分析したところ、双子の場合は 86%が母親で、不適切な養育が認められた家庭では、単胎児家庭の母親よりも双子家庭の母親の方が、うつ状態に陥っているケースが多くなっていました。また、双子への不適切な養育が認められた家庭では、そうでない双子の家庭よりも母親の健康状態が悪化している場合が有意に多く、不適切な養育の発生に、母親の健康状態が最も強く関連していることが判明しました。

＜期待される効果・今後の展開＞

本結果から、多胎児家庭は単胎児家庭よりも児童虐待の発生率が高いことと、虐待発生に関連する要因が明らかになりました。自治体は母親からの妊娠届を受理した時に多胎妊娠を把握することができるため、妊娠中から保健・医療・福祉の関係者が連携し、多胎を妊娠している母親やその家族に対し、妊娠中から情報提供や支援を開始することが重要です。そうすることで、多胎児家庭における育児負担を軽減し、多胎児への不適切な養育の予防、児童虐待の発生率の低減が可能になります。

＜資金情報＞

本研究は、科学研究費基盤研究費 B（23K20354）の助成を受けて実施しました。

＜掲載誌情報＞

【発表雑誌】Twin Research and Human Genetics
【論 文 名】Risk factor for child maltreatment at 3 years of age in Japanese multiples and singletons: a population-based study
【著　　者】Yoshie Yokoyama, Yasue Ogata, Karri Silventoinen
【掲載 URL】https://doi.org/10.1017/thg.2024.42

【研究内容に関する問い合わせ先】
大阪公立大学大学院看護学研究科
教授　横山 美江（よこやま よしえ）
TEL：06-6645-3536
E-mail：yyokoyama@omu.ac.jp

【報道に関する問い合わせ先】
大阪公立大学 広報課
担当：柴田
TEL：06-6967-1834
E-mail：koho-list@ml.omu.ac.jp